

日本語母語話者の中国語の語彙習得に関する一考察

—「母語からの移転」の観点から—

A Consideration of Chinese Vocabulary Acquisition by Native Speakers of Japanese

— Perspective of “Transfer from the Native Language” —

藺 梅*

Mei Lin

本稿では、第二言語習得の「母語からの移転」という観点から、日本語を母語とする中国語学習者の語彙習得について考察する。まず、先行研究を踏まえ、中国語と日本語の複音節単語の字形及び意味を比較対照する。次に、日本語話者学習者の中国語語彙習得は「正の転移」に限定されないことを示し、むしろ指導の現場では「負の転移」について着目すべきことを指摘する。そして、最後にその指導方法について筆者の考え方を提示する。

キーワード：第二言語習得、負の移転、同形異義、語用、アウトプット

I. はじめに

一つの言語を習得することは、大まかにいえば発音、語彙、文法の学習を意味する。中国語を習得する際に、世界で最も有利な国と言えれば日本だろう。確かに「同文同種」言われるほど日本語は中国語に似ていると考えられている。これに関連して白井恭弘¹⁾は外国語の習得について「日本語には漢語が多数入っているので中国語とは語彙が似ている。音声、文字はずいぶん違っているが、多くの漢字を共有しているため、語彙の習得がかなり楽になることが予測される。」と指摘している。

第二言語を習得する中で語彙の役割について、小池生夫²⁾は次のように指摘した。「第二言語を使って4技能を用いた言語活動を行う際、その全てにおいて中核的役割を果たすものは文構造についての知識と語彙知識である。例えば、主語や動詞や目的語の位置にあてはめる語彙を知らなければ文を作ることはできない。」また、語彙の習得は決して暗記することではなく、自由自在にコミュニケーションができるようにその言葉を使いこなすことである。

中国語の語彙と言えは「単音節、二音節、三音節、四音節、五音節以上」³⁾に分かれるが、中でも二音節の語彙の数は多く、使う範囲が最も広い。日本中国語教育学会の「中国語初級段階学

習指導ガイドライン」の学習語彙表⁴⁾では1000の単語に二音節単語数が499もある。また中国語の複音節単語は日本語との異同が最も錯綜しているものである。日本語母語話者の学習者にとって中国語を習得する際に、母語の働きはどのような影響を及ぼしているだろうか。一つの言語を習得するについてはいくつかの分野が存在するが、本稿では語彙の分野に焦点を当てて考察したい。

II. 先行研究

王順洪⁵⁾は日本語母語話者の中国語の語彙習得について、中国語と日本語の語彙には相違はかなり複雑な違いがあることを指摘し、その異同について「同形同義、同形近義、同形異義、異形同義」の4種類にまとめた。また語彙の誤用については、同形同義の言葉でも各々の品詞の違いと使用範囲の違いが誤用の原因だと指摘されているが、学習者の母語からの転移に関しては具体的な分析が見られていない。

黎・高⁶⁾は日本人留学生が中国語の語彙を習得する際に、字形の認知に心的辞典の働きがどのように関わっているかについて実験調査を実施した。具体的には中国語と日本語の二音節の「同形同義」、「同形異義」、「非日本語」の三種類の語彙に関して日本語話者の留学生に対して実験を行った。その結果、初級レベルの学習者は、まず、日本語の心的辞典の情報に頼ることにより、中国語の語彙を処理する傾向が高いことが明らかにされた。

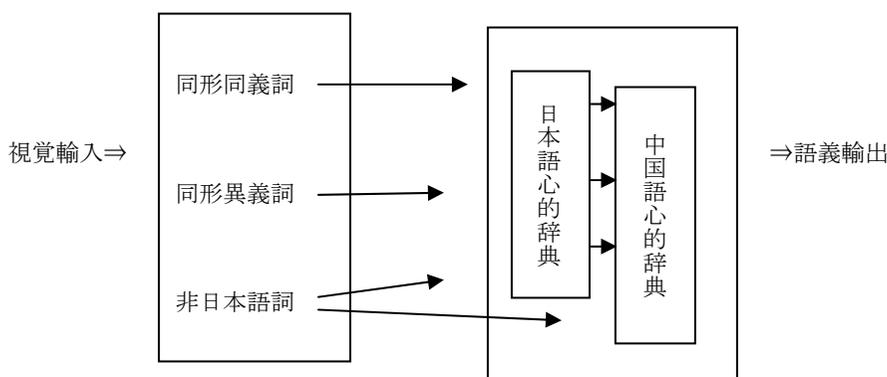


図1 初級学習者の中国語語彙の認知パターン⁷⁾

III. 第二言語習得 (SLA) 研究の「母語からの転移」の考え方

第二言語習得における母語の影響は「言語転移」もしくは「言語間における影響」と呼ばれている。学習者は第二言語を学習する際、当然のことながら、第一言語である母語の影響を受ける。「母語からの転移 (transfer from L1)」とは、私達が第二言語を学習する際に、母語の特性に影響

を受けることを言う。転移は、さらに「正の転移 (positive transfer)」と「負の転移 (negative transfer)」に下位区分される。「正の転移」とは、母語からの影響が習得する際に良い方向に働く場合で、そのため習得を促進させると一般に考えられている。一方、「負の転移」とは、母語の特性が第二言語の習得に悪い方向に働く場合で、別名、「干渉 (interference)」とも呼ばれ、習得を遅延させる場合が多いと考えられている。」⁸⁾

IV. 中国語と日本語の語彙の異同及び語用についての考察

中国語を習得する日本人学習者にとって、中国語と日本語の語彙が全て同形同義である場合、発音を除き、「正の転移」が大いに機能することになる。つまり母語に漢語があるという特性に影響を受けることになり、母語からの影響が習得上、良い方向に働くことが考えられる。しかし、実際に両言語間の語彙の相違はかなり錯綜している。発音を考慮しないことを前提にして、中国語と日本語の複音節の単語の字形と表意関係を一覧にまとめてみると、次のような項目に分かれる。

表1 表意を中心とする中国語と日本語における二音節の語彙の比較

分類	中国語⇔日本語		
①同形同義語	学生⇔学生	作文⇔作文	生活⇔生活
②類似形同義語	时间⇔時間	实践⇔実践	会议⇔会議
③同形類義語	研究 (以外に‘検討’の意味もある) ⇔研究 茶碗⇔茶碗 (食事用のものも指す)		
④類似形類義語	紧张 (張りつめる・手いっぱい) ⇔緊張 (張りつめる) 意见 (考え・不満) ⇔意見 (考え)		
⑤同形異義語	深刻⇔深い 严重⇔深刻	了解⇔知る 理解⇔了解	安静⇔静か 静养⇔安静
⑥類似形異義語	检讨⇔反省 研究⇔検討	颜色⇔色彩 脸色⇔顔色	告诉⇔教える 控告⇔告訴
⑦語素反対語	语言⇔言語	减轻⇔軽減	侦探⇔探偵
⑧中国語の離合詞と日本語の固定詞	留//学⇔留学	拍//手⇔拍手	结//婚⇔結婚

表1のように、中国語の複音節の単語を習得する際に、三つのケースを分類することができる。

1. ①は「正の転移」であり、②と⑦の項目は「正の転移」に近い形の習得となる。なぜなら②の類似形同義語は中国語の簡体字の書き方を習得できれば、①と同様に母語の知識によって生か

すことができる。⑦の語素反対語も語素を書き換え、繁体字を簡体字にすれば中国語になる。例えば「言語」の語順を逆にし、簡体字で書けば中国語の「语言」になり、同様な意味をもつ。では「正の転移」のいくつかの例文を見てみよう：

- 1) 1894年8月13日，英国化学家拉姆赛和物理学家瑞利在一次会议上报告，他们发现了一种性质奇特的新元素。
(1894年8月13日、イギリスの化学者ラムゼーと物理学者レーリーはある会議で、性質の珍しい元素を発見したと発表した。)
- 2) 请你通知大家，今天的会议改在明天举行。
(本日の会議は明日に変更になったと皆さんに伝えてください。)
- 3) 德国大学证明针灸能有效减轻疼痛。
(ドイツの大学は針治療が痛みの軽減に有効であることを実証した。)
- 4) 中国农村水电改造每年减轻农民负担30多亿元。
(中国の農村における水力発電の改良によって、毎年農民の負担が30億元あまり軽減されることになった。)

“会议”という単語は簡体字なので、これを習得するときに日本語の書き方にならないように注意すれば良いわけである。“减轻”を書き方だけでなく、語素を反対にするという二つのステップにより習得できる。

2. 中国語と日本語とは構文的に違うのが⑧の項目である。中国語の複音節の動詞には「動賓結構」のものである場合はアスペクト助詞（了，着，过など）や数量詞を伴う場合は動詞の直後になる。一方、同じ言葉でも日本語の構文法では漢語の活用がないため、アスペクト助詞がすべて語尾になる。

- 5) 我们在夏天结婚，好不好？结完婚，我带你到日本去度蜜月。
(私たち、夏に結婚したらどう？結婚したら、日本にハネムーンに行きましょう。)
- 6) 他结过婚，遇到我之前很久已经离了。
(彼は結婚していた。でも私と出会うかなり前に離婚していた。)
- 7) 因为她50年代曾在前苏联留过学，精通俄语，情况比较熟悉。
(彼女は50年代ソ連に留学したことがあるので、ロシア語に堪能で、状況も熟知している。)
- 8) 孙海平去美国留了几年学回来，道行更加深厚，成为国内少有的学者型教练。
(孫海平はアメリカに数年留学し、より専門性を深め、国内有数の学者タイプの監督となった。)

例文5)の“完”と6) 7)の“过”は必ず動詞の直後につくので、目的語になっている“婚”、“学”がその後になり、「结完婚」「留过学」が正しいわけである。さらに例文8)の「留了几

年学」のほうが、アスペクト助詞だけでなく数量詞も目的語の前に置かなければならないため、構文についての知識が確実に身につけなければ、単語の意味が分かっても習得することができていないことになる。

3. 日本語話者にとって最も習得し難いと考えられるのは、表1の③④⑤⑥の項目である。これらの語彙群の錯綜は最も注目されるべきである。なぜならば、字形が同じ、または類似しているが、表意上では様々なパターンがあるからである。

a. 一部の同形同義詞、類似形同義詞の中でも品詞の違いにより、使い方が違ってくる。例えば“習慣”“充实”の誤用例を見てみると：

誤1：我不那样的中国生活习惯。

正：我不习惯那样的中国生活。(私はあのような中国の生活に慣れない。)

誤2：在北大，因为充实生活，我们都愉快。

正：在北大，因为生活非常充实，我们都很愉快。(北京大学での生活は充実しているので、私たちはとても楽しい。)⁵⁾

誤1の中の“習慣”が中国語では名詞でもあり、動詞でもあるため、動詞として使う場合は目的語が後になるという構文法になっている。誤2の“充实”(充実)が中国語では動詞であると同時に形容詞でもあるため、ここでは形容詞として使われている。このように品詞の違いによって構文も変わるので、母語で文を作ると、マイナスの働きになり、誤用が生じるわけである。

b. 単語の字形は同じ、または類似しているが、表す意味は異なる。例えば“深刻”“安静”“便宜”などがある：

9) 温家宝主持国务院第三次全体会议指出我们对现代化建设规律有了更深刻的认识。

(温家宝は国务院第3回全体会議を主催し、「近代化建設の法則に対する我々の認識が一層深まった。」と指摘した。)

10) 胡锦涛说：“今天对埃及博物馆的访问给我留下了深刻印象。”

(胡锦涛は「今日のエジプト博物館の見学がとても印象的でした。」と言った。)

11) 课程改革引发中国校园文化深刻变化。

(カリキュラムの改革は中国のキャンパス文化に劇的な変化をもたらした。)

12) 我不知该怎么安慰她，只能安静地听她说完自己的事。

(私は彼女をどう慰めたらいいか分からなくて、ただ彼女が話し終わるのを静かに聞くことしかできなかった。)

13) 一踏进研究中心大门,人们便会被这里安静幽雅的环境吸引。

(一步センターに入ると、すぐにこの奥ゆかしく閑静な環境に魅かれる。)

- 14) 掌声和笑声过后,大厅里安静下来。

(拍手と笑い声がやむと、ホールは静かになった。)

中国語の“深刻”、“安静”はともに形容詞であり、“深刻”は主に「深い」意味を表し、“安静”は単に「静か」の意味になる。日本語にあるような意味はないため、この場合は「負の転移」となる可能性が高いと考えられる。

- c. 字形は同じ、または類似しているが、表す意味が一部重なる例として“紧张”(緊張)“意见”(意見)“事情”(事情)などの単語が挙げられる：

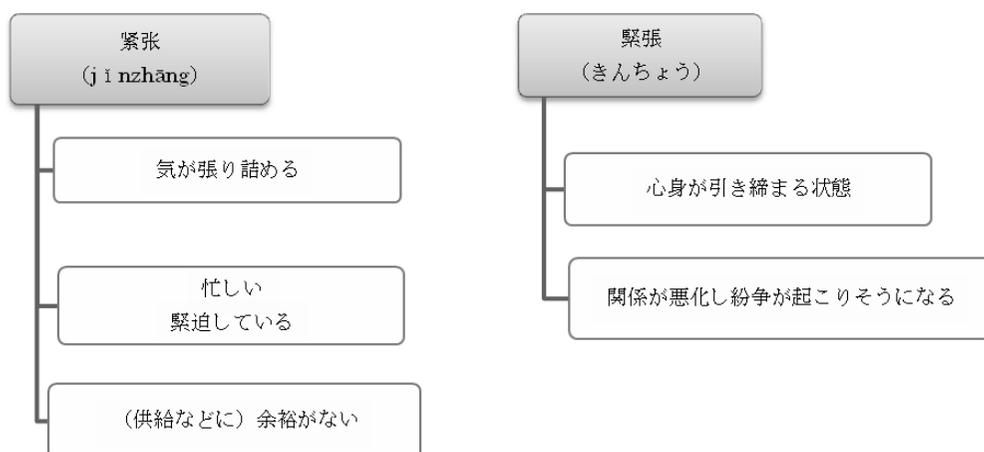


図2 中国語と日本語における「紧张」と「緊張」の表意的異同⁹⁾

- 15) 我们就是作一个社会调查,你也不用那个太紧张,就随便聊聊。

(私たちは社会調査するだけですし、あなたもそんなに緊張しないで、気軽に話しましょう。)

- 16) 日内瓦会议开始时,中美双方的关系是十分紧张,尖锐对立的。

(ジュネーブ会議が始まった頃は、中米関係は非常に対立していて緊迫した状態にあった。)

- 17) 舞台T台表演的时间很紧张,从退场更衣到第二次出场,只有几分钟的时间,

(ステージ T 型台での出演時間はとても短く、退場し着替えて、その次の出番までにはわずか数分しかない)

- 18) 曹操于是在自己控制的范围内推广屯田,缓解了粮食的紧张状况。

(曹操は自己勢力範囲内で広く屯田を行い、食糧不足の状況を緩和した。)

図2で示したように、中国語の“紧张”と日本語の“緊張”の意味の複雑な絡みがみられ、例文の邦訳を見ても表現上の違いに開きがある。このような単語を学習する際には、「正の転移」と「負の転移」がともに生じることを予測しながら、文脈による理解と多くの用例の学習が必

要とされる。

V. 指導についての提言

1. 日本の大学生学習者の学習環境

学習者が教室環境において第二言語を身につけようとするとき、彼らの内部では一体どんなことが起こっているのだろうか。そして、それは教師の働きかけやその他の外的要因とどのような関係があるのだろうか。このような問題に関する研究は、教室第二言語習得 (classroom second language acquisition)¹⁰⁾ とよばれる研究領域である。

日本では、社会人の中国語教室における学習や、ごく一部の高等学校における中国語の授業を除けば、中国語の教育現場と言えばその大半は大学だろう。ここで、大学で中国語を学ぶ学習者にとっての不利な要素を二点挙げておきたい。第一は学習環境であり、教室で第二言語を学習すること、即ち「教室第二言語習得」である。自然環境における L2 学習者は長期的にあるいは集中的に目標言語と接触する機会があるが、教室の学習者の場合、教室外では常に母語を使用するため、中国語に触れる機会が制限される。¹¹⁾ 二番目挙げられるのは学習者の年齢である。大学生の場合は国語力がほぼ定着しているため、中国語を学習する際に母語からの「干渉 (interference)」が非常に起こりやすいと考えられる。「L1 (母語) が L2 (第二言語) と共通している要素をもっているときには学習の助けになるし、異なっているときには障害になる」¹²⁾

2. 教材の問題点

日本で出版された教材はやはり本文中心のものが主流だとみられる。本文を理解するために文法説明と新出単語があり、発音練習以外に、教師の文法説明を聞き、提示された単語の意味によって最終的に本文の内容を理解することが目標になっている。しかも一度新出単語として出現した場合は、その後は学習対象にならない。学習者にとっての語彙学習は発音と書き方になり、いわゆる“語彙処理”のレベルが非常に浅くなってしまう。さらに、複数の意味がある単語については、教科書に提示された一つの意味のみを学習して終わってしまう。

3. 指導についての提言

最後に語彙習得プロセスにおけるインプットとアウトプットというステップに関して、その指導方法を考察したい。中国語の文字は漢字であり、イメージ性が強い特徴がある。この場合は学習者の記憶にある共通のイメージの言葉を喚起する可能性が非常に大きいと考えられる。従って、最初から中国語として意味を理解するという意識をもたせることが重要である。またあえて同じ字形の日本語と字形、発音、意味について比較させ、それぞれの語用的な違いを理解させる。こうして多角的に一つの単語を学習することによって、学習者に学習する単語に対する認知的な負

荷を増加させることにより、語彙処理のレベルを深くなると考えている。

例えば：安静（ānjing）という言葉进行学习する際に、学習者は本能的に日本語の“安静（あんせい）”を思いつくと考えられるため、まず、発音から覚えさせ、次に意味を説明すると同時に日本語と比較させる。ここまでの段階はインプットになるが、アウトプットのステップでは安静という単語を使い、一定の数のフレーズ、短文を作り、そのミスを修正するトレーニングをさせる。

このような学習方法によって、次のような効果をもたらす可能性がある。

- a. 新しい語彙を習得する際に学習者に適度な負荷をかけることによって、その言葉（字形、発音、意味）がより印象的になり、長期的に記憶に残る可能性が大きくなる。
- b. 学習者が話したり、書いたりすることにより、さまざまな点において語彙習得が促進すると考えられる。

①アウトプットすることにより、自分には言いたいことが第二言語では言えないことがあることに気づく。

②アウトプットすることにより、自分の言語表現が目標言語と異なっていることに気づくことができる。この違いに気づくことにより、自分の言語知識や規則を修正することができる。

③アウトプットすることにより、言語運用の流暢さが高まる。

一見ほぼ従来の指導方法とはそう違わないように思われるが、ここで強調したい点は、日本語話者学習者にとって「負の転移」になる語彙だけを取り上げて「スペシャル学習」が必要だということである。しかも語彙のアウトプットの指導により、文法の習得にもプラスになると考えられる。

VI. おわりに

本稿では中国語と日本語において共通点が最も多いと考えられる語彙に焦点を当て、その表面上の共通点と内面的な相違を明らかにした。具体的には、第二言語習得の「母語からの転移」という観点から日本語話者が中国語の語彙を習得する際の特に複音節単語の習得について考察し、「正の転移」と「負の転移」が同時に存在することを明らかにした。そして、最後に今後の学習者に対する指導上の提言を試みた。

日本では大学入学後、初めて中国語を学習する大学生が最も多い。彼らはすでに母語である日本語に関する十分な国語力をもっている。その中で母語との類似性が非常に高い中国語の語彙を習得するには、有利な一面があるものの、同形異義、類似形異議の中国語の語彙の側面に直面しなければならない。外国語を習得するということはその言語をどこまで使いこなせるかを常に問われることであり、またどのように学習者に効果的な学習を提供できるかは教育現場の教師の責務である。本稿で示したアウトプット重視の見地に立ち、今後の教育現場でその効果を実証することを今後の課題としたい。

参考文献、注

- 1) 白井恭弘：『外国語学習の科学』 岩波新書, 2008.9 p5
- 2) 小池生夫編集主幹：『第二言語研究の現在』 大修館書店, 2009.1 p123
- 3) 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編『現代中国語総説』 三省堂, 2004
- 4) 中国語教育学会：「中国語初級段階学習指導ガイドライン」2007.3
- 5) 王順洪：『日本人漢語学習研究』 北京大学出版社, 2008.1 pp111-121
- 6) 黎静・高立群：「日本留学生心理词典的词汇通达」『对外汉语教学习得研究』 北京大学出版社, 2006 p235
- 7) 図1は黎・高（2008）「日本留学生心理词典的词汇通达」より引用した
- 8) 白畑知彦・若林茂則・村野井仁：『詳説第二言語習得研究』
- 9) 図2は小学館『中日辞典・日中辞典』の解釈により作成された
- 10) 小池生夫編集主幹：『第二言語研究の現在』 大修館書店, 2009.1 p103
- 11) 水野光晴：『外国語習得その学び方 100 の質問』 研究社, 2001.3 p59
- 12) 同上 p45
- 13) 白井恭弘：『外国語学習に成功する人、しない人』 岩波書店, 2009.6
- 14) JACET SLA 研究会：『文献からみる第二言語習得研究』 開拓社, 2009
- 15) 迫田久美子：『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク, 2002
- 16) 村野井仁：『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』 大修館書店, 2009
- 17) 本稿の中に挙げた例文（誤用例を除く）は、CCL（Center of Chinese Linguistics PKU）より検索したものである。